

新発見史料・京都高等女学校『校友会報』の複製・総目次の作成とその公開

— 京都高等女学校の設立と学科の変遷、
『校友会報』の誌面構成について —


坂 口 満 宏

はじめに

本稿は、令和4年度宗教・文化研究所の研究助成による「新発見史料・京都高等女学校『校友会報』の複製・総目次の作成とその公開」の成果報告書で、2023（令和5年）1月に刊行した復刻版『校友会報』の「解説」に加筆したものである。

ここにいう『校友会報』とは、1910（明治43）年5月、私立京都高等女学校内に設立された「校友会」が、1911年から1922年にかけて、年に1冊ずつ発行していた雑誌（記念誌）のことである。その存在については、1960年に発行された『京都女子学園創立五十周年記念誌』がその2頁目に「明・44 校友会誌第一号を発行」と記載し、その巻頭ページの写真を掲げていたことから、つとに知られていた。しかし『京都女子学園八十年史』（以下『八十年史』、1990年、114頁）および『京都女子学園百年史』（以下『百年史』、2010年、122頁）になると、「校友会」に関する記述はあるものの、『校友会報』への言及は一切見られなくなった。京都女子大学図書館はもとより、公共の図書館においてもこの雑誌を所蔵するところがないことから、探し求めても『校友会報』の参照ができなかったことによるものと思われる。

2021年3月、筆者は古書業者より11冊中9冊の『校友会報』を入手する機会を得、2022年3月には第3号を所蔵する中西直樹氏より原本の借用と写真撮影の許可を得て、画像データを入手することができた。そこでこれら10冊を底本

として影印本をつくり、そこから詳細な総目次を作成することとした。今回の復刻までに原本を探し出せなかった第5号については、1910年から1915年の間、校長より京都府知事に提出されていた教科書認可申請書（京都府立京都学・歴史館所蔵『京都府庁文書』）を編集し、その書名、著作者名、変更理由などを掲載した「代替版」を作成することとした。こうして出来上がったのが今回の復刻版全12冊で、 1 は復刻版『校友会報』全12冊の表紙一覧である。

その構成と底本とした『校友会報』の発行年月日は以下の通りである。誌名の異なるものがあるが、ここでは『校友会報』と総称することとする。

- ① 『校友会報』 記念号〔第1号〕 1911（明治44）年5月28日発行
編集兼発行者 私立京都高等女学校内 田淵只一
発行所 私立京都高等女学校 校友会
- ② 『校友会報』 第2号 1912（明治45）年7月1日発行
編集兼発行者 私立京都高等女学校内 田淵只一
発行所 私立京都高等女学校 校友会
- ③ 『会報』 第3号 1913（大正2）年7月6日発行
編集兼発行者 私立京都高等女学校内 田淵只一
発行所 私立京都高等女学校 校友会
- ④ 『校友会報』 第4号 1914（大正3）年11月1日発行
編集兼発行者 私立京都高等女学校内 田淵只一
発行所 私立京都高等女学校 校友会
- ⑤ 『校友会報』 第5号 未発見……原本を欠くため「代替版」を作成
- ⑥ 『校友会報』 第6号 1916（大正5）年3月4日発行
編集兼発行者 私立京都高等女学校内 田淵只一
発行所 私立京都高等女学校 校友会
- ⑦ 『校友会報』 第7号 1917（大正6）年2月11日発行
編集兼発行者 私立京都高等女学校内 田淵只一

図1 復刻版『校友会報』全12冊の表紙一覧

『校友会報』記念号〔第1号〕 1911年5月28日	『校友会報』第2号 1912年7月1日	『会報』〔第3号〕 1913年7月6日
		
藤棚 彩色	藤棚 彩色なし	校友会名あり、無地
『校友会報』〔第4号〕 1914年11月1日	『校友会報』〔第5号〕 代替版	『校友会報』〔第6号〕 1916年3月4日
		
秋の花（野菊か） 彩色		梅の花 三角印にキの署名
『校友会報』〔第7号〕 1917年2月11日	『校友会報』第8号 1918年3月25日	『校友会報』第9号 1919年3月25日
		
春の花（花ニラか） 彩色	松	羊飼い絵柄の植木鉢と小鳥
『校友会雑誌』第10号記念号 1920年10月20日	『校友会誌』第11号 1922年3月25日	『校友会報』 総目次・解説
		
兎と鳳凰	裸の男児と鳥	

- | | | | |
|---|---------------|--------------------------|------|
| | 発行所 | 私立京都高等女学校 | 校友会 |
| ⑧ | 『校友会報』 第8号 | 1918 (大正7) 年3月25日発行 | |
| | 編輯兼発行者 | 私立京都高等女学校内 | 田淵只一 |
| | 発行所 | 私立京都高等女学校 | 校友会 |
| ⑨ | 『校友会報』 第9号 | 1919 (大正8) 年3月25日発行 | |
| | 編輯兼発行者 | 私立京都高等女学校内 | 田淵只一 |
| | 発行所 | 私立京都高等女学校 | 校友会 |
| ⑩ | 『校友会雑誌』 第10号 | 記念号 1920 (大正9) 年10月20日発行 | |
| | 編輯兼発行者 | 私立京都高等女学校内 | 原 俊雄 |
| | 発行所 | 私立京都高等女学校 | 校友会 |
| ⑪ | 『校友会誌』 第11号 | 1922 (大正11) 年3月25日発行 | |
| | 編輯兼発行者 | 私立京都高等女学校内 | 近藤眞將 |
| | 発行所 | 私立京都高等女学校 | 校友会 |
| ⑫ | 『校友会報』 総目次・解説 | | |

「編輯兼発行者」の田淵只一は1911年に就任した私立京都高等女学校の事務職員・監事、原俊雄は1920年に就任した京都裁縫女学校・京都女子高等専門学校・養成所事務職員で、それぞれの庶務課主任を担当する職員であった。近藤眞將は1921年に就任した京都裁縫女学校の教諭であった（『八十年史』、648～650頁）。

『校友会報』の各号には、表紙、口絵、教職員による論説、女学生たちの和歌、日々の随想、校友会学芸部・運動部の記録、運動会、学芸会、卒業式、同窓会記事、一年間の学校行事を詳細に記載した雑報、そして巻末には文中女学校、私立京都高等女学校、私立京都裁縫女学校の卒業生の氏名と住所、改姓や死没に関する情報が期生別・専攻別に掲載されている。いまだ1915年発行と思われる第5号を見出していないが、それでもこれらが私立京都高等女学校の設立期

新発見史料・京都高等女学校『校友会報』の複製・総目次の作成とその公開から東山校地への移転と校舎の拡充期、そして京都女子高等専門学校創設期における学校行事やバザー、女学生たちによる部活動・創作活動の実際を現代に蘇らせる第一級史料であることは論を待たないものである。

なお、学校の名称から「私立」の冠称を削除してよいとした文部省の認可がおりたのは1919年であった。今回翻刻した史料の多くはそれ以前のものにあたることから、厳密には「私立京都高等女学校」と表記すべきものである。しかし読みやすさを重視する観点から、この解説では「私立京都高等女学校」を「高女」、「私立京都裁縫女学校」を「裁女」、「京都女子高等専門学校」を「女専」と略記し、いずれもカッコを付けずに記載することとする。ただし表題や史料引用に際しては原文通りの表記とした。

このようにして作成した『校友会報』の復刻版については、京都女子大学図書館ならびに京都府立京都学・歴彩館、京都学校歴史博物館に寄贈するとともに、下記の日程で公開展示を行い、『校友会報』の総目次・解説を配布した。

2023年6月1日～30日、真宗連合学会第69回大会特別展示「真宗系の仏教主義女学校・近代の京都女子学園の歴史」の一環として、京都女子大学図書館交流の床1階ホールにおいて、復刻版と解説パネルを展示。

2023年6月13日～30日にかけて京都女子大学図書館貴重書コーナーにおいて『校友会報』の原本と復刻版ならび解説パネル展示を行った。

1. 文中女学校・私立京都高等女学校・私立京都裁縫女学校の設立と学科の変遷

文中女学校・私立京都高等女学校・私立京都裁縫女学校の設立過程については、『八十年史』および『百年史』に詳述されていることから、ここではその過程を概観することにとどめ、『校友会報』を読み進めるうえで必要となる各種学科の設置とその変遷について解説することとしたい。

甲斐駒藏・和里子夫妻の文中女学校 1899(明治32)年、西本願寺の在家信者として活躍していた松田甚左衛門が「顕道女学院」を創設すると、そこに甲斐駒藏・和里子夫妻も加わり、教員として活動した。しかし1900年9月、甲

斐夫妻は顕道女学院を退職し、醒ヶ井五条下ルに「文中園」という私塾を開くこととなった。同年11月、生徒が増えたことから校舎を花屋町東中筋角に移し、名を「私立文中女学校」と改めた。学科は本科（3ヶ年制）と高等科（2ヶ年制）の2つで、修業年限は5年であった。編入制度を設けており、尋常小学校卒業者は本科第1学年に、高等小学校卒業者は本科第3学年に編入することとした。そのため文中女学校は1901年3月に早くも第1回卒業式を挙げる事となったのである。『校友会報』第1号に記載されている8名が最初の卒業生であった（『校友会報』第1号、61頁）。その後も文中女学校は1910年3月の第9回卒業式にいたるまで卒業生を送り出し続け、『校友会報』第1号と第4号に記された名簿によれば、その合計数は73名となった。このように卒業生の人数と氏名が判明したことも『校友会報』が発見されたことによる成果である。

矢部善蔵による私立京都高等女学校 その間に明治時代の教育者・矢部善蔵は、1907（明治40）年4月、独力で五条通堀川西入柿本町に高等女学校令にもとづく「私立京都高等女学校」（高女、本科3ヶ年制と裁縫専修科2ヶ年制）を設立し、翌年には「私立京都商業女学校」（商女、本科2ヶ年制と速成科1ヶ年制）を併設した。修業年限の短かった高女の裁縫専修科と商女の速成科では早くも1909年3月に最初の卒業式を挙行し、裁縫専修科では20名の、商女の速成科では4名の卒業生を出していた。その氏名は『校友会報』第1号に記載されている（64～66頁）。この頃から校長の矢部は体調を悪くしたようで、1909年4月からは阿刀田令造が校長となっていた。

甲斐駒蔵による私立京都高等女学校の買収 一方、甲斐駒蔵夫妻が創設した文中女学校は、西本願寺や大日本仏教慈善会財団からの補助を得たことで学校経営の立て直しをはかり、軌道に乗り始めていた。そうした折り、女学校を譲渡したいという話が矢部から駒蔵に持ち掛けられたようである。1910年2月、駒蔵は矢部が創設した高女の校舎と校具の一切を買い取ることを決め、これに文中女学校の生徒全員を編入させることとした。そのため高女の経営権を得た甲斐駒蔵は、1910年3月20日に高女本科生の第1回卒業式（34名）と裁縫専修

新発見史料・京都高等女学校『校友会報』の複製・総目次の作成とその公開
科の第2回卒業式(24名)、それに商女本科生の第1回卒業式(10名)を挙
行することとなった。学科別卒業生の氏名は『校友会報』第1号に記
載されたとおりである。

仏教婦人会連合本部を经营主体とする私立京都高等女学校 矢部から高女
を買収し、卒業式を挙行したものの、経営困難を覚えた駒藏は、かねてから女
学校の設立を望んでいた本願寺派仏教婦人会連合本部と交渉し、高女の校舎と
校具一切の権限を譲ることとした。こうして仏教婦人会連合本部(総裁大谷籌
子裏方)の事業による「私立京都高等女学校」(高女、本科4ヶ年制と裁縫専
修科3ヶ年制)が発足したのである。1910年4月のことであった。このとき校
長の阿刀田が他校に転出することとなったため、朝倉暁瑞が校長代理となり、
翌年3月、正式に校長となった。

校友会と同窓会の発足 この間に高女では、1910年5月28日、校内にて「校
友会」の発会式が挙行され、「会則」が定められた。ついで同年10月19日に「本
校卒業生会」が催され、協議の末「同窓会」を設立することとなり、幹事が互
選され、「会則」が制定された。こうして『校友会報』を発行する基盤が出来
上がっていった(『校友会報』第1号、40~47頁)。

私立京都裁縫女学校の併設と校則 その後駒藏は、1911年2月、矢部が持っ
ていた私立京都商業女学校の権利を譲り受ける手続きを取り、3月に校名を商
業女学校から「私立京都裁縫女学校」(裁女)に改め、予科(1ヶ年制)、本科
(2ヶ年制)、速成科(1ヶ年制)の3科を設け、各科に実業という学科を配置
した。そして裁女が併設されたことにともない、高女にあった裁縫専修科は廃
止となった。

『校友会報』第1号に掲載された「本校の歴史及現況」(35~40頁)は、こう
した高女と裁女の設立経緯を整理しているもので、創立者と創立年次、沿革、
設備、教員の氏名、経費予算額が記載されている。また『校友会報』第1号、
第2号の巻末には「私立京都高等女学校々則」「私立京都裁縫女学校々則」が
収録されている。いずれも初出の史料として貴重である。

女子大学設立趣意書と東山への移転 高女と裁女の経営主体となった仏教婦人会連合本部が次に目指したのは女子大学の設立であった。1911年1月に急逝した大谷籌子裏方の遺志を引き継いだ仏教婦人会連合本部と九条武子本部長は、1912年3月、全国各地の婦人会幹部を集め、「女子大学設立趣意書」を発表した。これを受けて高女では

○女子大学、我が校の経営者たる仏教婦人会連合本部に於ては、故総裁の御遺志を奉し、新に女子大学を設立せんと欲し、画策既になり近々土を起さんとす。

来春を待たば其の一部の工了り、我が校は女子大学附属として是れに移転す。吾れ等は会員諸嬢と共に勉励以て国に報し、総裁の御遺志と経営者の勞に酬ひざるべからず。婦人会本部に於て公表せられたる設立趣意書を別項に示さん（『校友会報』第2号、45～46頁。適宜、句読点を付した。以下同じ）。

と述べ、女子大学の付属校となる期待と覚悟を記し、「女子大学設立趣意書」の全文を掲げた。

1913（大正2）年になると各地の仏教婦人会において女子大学の設立をめざす運動が活発になり、多くの寄付金が集められた。10月には校舎の移転先を大谷家の所有地があった下京区今熊野町（現在の東山区今熊野北日吉町）とすることが認可され、翌年から移転・新築工事が始まった。1914年8月末に移転準備が完了し、9月7日に新校舎において二学期の始業式が挙行された。新築校舎の全景写真は『校友会報』第4号の口絵に、移転までの経過については同号の雑報欄に記載されている。

補習科・専攻科の設置と京都女子高等専門学校の設立 この間に高女では1911年7月に補習科（1ヶ年）設置の認可を得ていた。これは高女の本科を卒業した学生がさらに学ぶための学科であったが、1912年3月6日、補習科に「教育科目」を加えることが認可され、補習科の課程を終えた学生に尋常小学校教員免許無試験検定の特権が授与されることとなった（『校友会報』第2号、42頁）。

新発見史料・京都高等女学校『校友会報』の複製・総目次の作成とその公開
裁女では1913年3月に補習科（1ヶ年）設置の件が認可され、1916年2月4日
には予科を廃止し、本科の修業年限を2ヶ年から3ヶ年に変更することが認可
された。

さらに高女では補習科を廃止し、新たに修業年限2ヶ年の専攻科を設置する
こととし、1917年5月にその申請が認可された。専攻科は家事・裁縫を主とする
第1部と国語・漢文を主とする第2部からなるもので、専攻科の学年別科目
と時間数については『校友会報』第8号の「本校の沿革及び現況」（37～43頁）
に詳しく記載されている。1918年12月12日には京都府より、高女専攻科卒業生
に対して無試験検定にて尋常小学校本科正教員の免許状を授与するとした通牒
が出された（『校友会報』第9号、57頁）。こうした一連の学科の改廃は、より
多くの女学生を受け入れるための改組であったが、女子大学を設立するための
基盤づくりでもあった。

1919年になると西本願寺では女子大学設立に向けた運動が始まり、文部省と
の折衝が重ねられたが、女子大学の設立は認められなかった。そこで専門学校
令にもとづく京都女子高等専門学校を創設することとし、1920年3月、設置が
認可された。

女専の設置が認められたことにより、高女では専攻科を廃止とし、1920年当
時第1学年であった在学生在を女専に編入させることとした。女専の学科は家政
科・国文科・英文科の三学科で、修業年限は3ヶ年であった。このほかに別科、
選科を置いていた。こうして東山の地に高女・裁女・女専の三校がそろうこと
となり、東山三校と呼ばれるようになったのである。

図2は、東山に三つの学校がそろうまでの推移と高女・裁女の学科の変遷を
図示したものである。この図を手元に置き、『校友会報』の随所に出てくる女
学生の所属学科名と学年を照らし合わせていただければ幸いである。

図2 私立京都高等女学校・私立京都裁縫女学校の学科変遷図

年月	私立京都高等女学校の学科変遷		私立京都裁縫女学校の学科変遷				
1907年4月	矢部善蔵、私立京都高等女学校設立		私立京都商業女学校を併設				
1907年4月	本科設置 3ヶ年制	裁縫専修科 2ヶ年制					
1908年4月		裁縫専修科 3ヶ年制		本科 2ヶ年制	速成科 1ヶ年制		
1909年4月							
1910年2月	甲斐駒蔵、私立京都高等女学校を買収						
1910年4月	甲斐駒蔵、私立京都高等女学校に 関する権利を仏教婦人連合本部に移譲						
1910年4月	本科設置 4ヶ年制	裁縫専修科 3ヶ年制					
1911年2月				甲斐駒蔵に私立京都商業女学校の権利移る			
1911年3月				私立京都商業女学校を私立京都裁縫女学校と改称			
1911年4月				予科 1ヶ年制	本科 2ヶ年制	速成科 1ヶ年制	
1911年7月							
				補習科設置 認可1ヶ年制			
1912年3月				教育科目を 加える件認可			
1913年3月							補習科設置 認可1ヶ年制
1915年3月							
1916年2月					予科廃止		
1917年5月				3ヶ年制			
1917年6月	教育科目を 加える件認可						
1917年6月		補習科廃止 専攻科設置 1部・2部 2ヶ年制					
1918年5月					補習科廃止 専攻科設置		
1919年8月	「私立」の冠称を削除する件認可						
1920年3月		専攻科廃止					
1920年3月	京都女子高等専門学校設置認可、本科（家政科・国文科・英文科）、別科、選科。						
1929年2月			補習科設置 1年制				
1944年4月				京都裁縫女学校を京都女子商業学校と改称			

〔典拠〕『校友会報』第1号所収「私立京都高等女学校校則」「私立京都裁縫女学校校則」、『昭和十年度公文書（巻） 京都高等女学校 京都裁縫女学校』、『京都女子学園八十年史』をもとに作成。

2 『校友会報』の誌面構成

(1) 表紙

『校友会報』の判型は220mm×150mmで、当時の学術雑誌に多くみられた菊版に相当するものである。表紙の意匠に何らかの特徴があるのかと思い、今回入手できた10冊を並べてみたが、誌名はもとより、その書体も毎号異にしており、一貫性はみられなかった（前掲図1参照）。それでも第1号と第2号の表紙には同じ構図の藤棚、第4号には秋の花、6号では梅の木、7号で春の花、8号には松葉が描かれていた。会報の刊行時期にふさわしい植物が題材にとられたようである。

表紙画の作者については、第1号に「◎表紙画 本会報表紙画は鈴木教員の特に本会のために筆をとられたるもの茲に記して謝意を表す」（『校友会報』第1号、60頁）とあったことから、京都高等工芸学校を卒業した鈴木泰造によるものであることがわかった。第6号の表紙には三角印の中に「キ」の署名があるが不明である。第9号には羊飼いを描いた植木鉢と小鳥、第11号には裸で横たわる子供と鸚鵡のような鳥が描かれている。女学生の作品かもしれないが、作者とモチーフ、ともに不詳である。第10号は高女の創立10周年と女専の開校を記念したものであることから、上を見据えて羽ばたく鳳凰と跳ねる兎の図が描かれている。右上に「Tom」との署名があるが、不明である。

(2) 口絵と目次

『校友会報』の各号には、口絵として数枚の写真が印刷されている。その内容を大別すると①九条武子（第1号、第10号）や明如上人裏方心光院の歌（第4号）など本願寺関係のもの、②新築校舎（第4号）、京都幼稚園運動場（第8号）、校舎（第10号）などの施設関係、③高女・裁女の卒業生、教職員の集合写真、④シベリヤ出征軍慰問絵葉書の一部（第9号）など生徒の製作品を写したものの4つとなる。

③の高女・裁女卒業生と教職員の集合写真の多くは、各年度末に作成された

『卒業記念写真帖』からの転用だと思われるが、1918年度以前の写真帖については未見であり、すべての照合はできていない。写真帖の発見も急務の課題である。同様に④シベリヤ出征軍慰問絵葉書についても原本は未見である。高女と裁女では製作品展示会に合わせて絵葉書を作り、頒布していた。こうした絵葉書の収集も重要な課題である。

目次のレイアウトでは、第1号～第9号まではいずれも飾り罫を用いて目次を1頁に収めているが、第7号と8号のみ2頁目に「作文」と題して作品名・学年・生徒の氏名を挙げている。第10号は記念号であるため記事も多く、2頁取りとしている。11号はシンプルなつくりである。

注目すべきことは、第3号の目次の左隅に「大藪雪子」という名前の書き込みがあることである。大藪雪子とは、1913年3月22日に高女の裁縫専修科3年を卒業した「大藪ゆき」その人であろう（『会報』第3号、52、72頁）。『校友会報』第4号以下の「卒業生氏名」にもその名は記載されている。個人情報の扱いとしては慎重を期さねばならないものだが、史料の来歴を今に伝える証人であることから書き込み部分を消しとらず、そのまま復刻することとした。

（3）『校友会報』発刊の辞、「会員諸姉に告ぐ」

『校友会報』記念号（第1号）巻頭に掲げられた「会報の発刊に就て」は無署名であるが、高女の校長であり、校友会の会長であった朝倉暁瑞の手によるものとみていいだろう。その前段において朝倉は、高女が仏教婦人会連合本部の経営下におかれるまでの経緯、1910年9月に補欠募集して生徒を増やしたこと、卒業生を出したが新入生が増えたことで生徒数が200名になろうとしていると語ったうえで、

而して本校内既に翠松会なるものありて、毎年一回小冊子を作りて本校の状態等を記載し、これを生徒并に同窓生に頒ち来りしが、設立者の変更は延びて此事業を為すに不便ならしめ、ついに先学年に於て此挙を為す能はざりしは又蓋し止むを得ざりしなり（『校友会報』第1号、1頁）。

新発見史料・京都高等女学校『校友会報』の複製・総目次の作成とその公開と述べていた。「翠松会」とは、矢部善蔵が経営していた高女時代に作られ、小冊子を発行していた同窓会のことである。ここで朝倉は、高女と商女の経営権は矢部から甲斐駒蔵へと順次譲渡されていったが、1910年度に限り、同窓生に対する冊子の頒布ができなかった、やむを得なかったと詫びていた。そして1911年は親鸞聖人の650回大遠忌にあたることから、この機を逃さず小冊子を編纂し、「校友会報と名け校友会雑誌に代用すること、なしぬ」としていた。

こうした経緯から『校友会報』は発刊されるにいたったが、その後も朝倉は校友会の会長として「本校の将来に就きて」（第2号）、「会員諸姉に告ぐ」（第6、7、8号）、「校友諸姉に」（第9号）、「校友会に対しての希望」（第11号）と題した巻頭記事を掲げ、会員である女学生たちを激励し、鼓舞していた。いずれも短文ではあるが、倫理学者・朝倉暁瑞の面目躍如たる思いを見る文面である。

（4）論説・論叢

『校友会報』では、いずれの号においても巻頭言に続けて、外部の大学講師や本校の教員による論説を掲載していた。第1号と第10号は記念号であることから、京都市内の小学校校長による高等女学校における女子教育への希望、高等女学校の校長による女子の高等専門教育に対する希望を論じた短文が特集されていた。第4号から第8号にかけては、高女と裁女の教員による論説やエッセイ、料理のレシピなども掲げられるようになっていた。『校友会報』の編纂にもゆとりが出てきたように見える。

（5）女学生たちの和歌と作文

『校友会報』において注目すべきことのひとつが、多くの誌面を割き、女学生たちの和歌と作文を数多く収録していることである。すべての作品には学年と氏名が付されており、史料的にも意味があるものである。

第1号と第2号では「和歌」と「日誌の一節」の2本立てであったが、第3

号からは「文苑」欄が加わり、長めの文章も掲載されるようになった。和歌では春夏秋冬や草花などが共通のお題として与えられていたが、第6号には1915年に京都で行われた大正天皇の「御大典」を詠んだものが多数収録されている。「文苑」欄には題材を異にした短文が多数掲載されている。修学旅行記(第3号)や卒業旅行記(第10号)と題されたものは、数人によって書き繋がれたものだが、記録文としても注目される。

当然、こうした作品は『校友会報』への掲載に先立ち、教員によって検閲され、修正も加えられていることから、額面通りに受け取ることはできないと見る向きもあるだろう。それでもここではこうした側面を理解したうえで、100年前に生きた女学生たちの言葉に耳を傾け、何気ない日常を切り取った一文を通して、その心情はもとより、社会を観る眼や生き方の証をみいだしていきたいものである。ある女学生に着目するならば、その学生の入学から卒業までの4年間の作品を見出すことができるわけで、一つのポートフォリオを作ることとなるはずである。女学生たちによる作品群の更なる読み込みと分析、考察が期待される所以である。

(6) 校友会関係記事

経営主体を仏教婦人会連合本部とした高女は、1910年4月に新学期の始業式と入学式を挙行し、5月28日の地久節(皇后の誕生日)に校友会を立ち上げた。以下はその会則の一部である。

第一条 本会は私立京都高等女学校生徒及新旧教職員を以て組織す

第二条 本会は本校生徒を会員とし本校新旧教職員を客員とす

第三条 本会は会員相互、会員客員間の懇和を図り且本校教養の主旨を助成するを目的とす

第四条 前条の目的を達せんがために本会に左の各部を置く

学芸部 運動部 園芸部 雑誌部

第五条 学芸部を更に技芸部、音楽部、講演部の三に分ち運動部はテニス、

新発見史料・京都高等女学校『校友会報』の複製・総目次の作成とその公開
ピンポン、薙刀、クリケット、フットボールの四部に分つ、園芸部に於ては各級担任の園芸花壇に於て同教師の指図により園芸の知識を取得し傍ら趣味を養ふの一助となす、雑誌部に於ては年一回若くは二回校友会雑誌を発行し又各種の雑誌新聞を備へて生徒の閲覽に備ふ（以下略、『校友会報』第1号、40頁）

これまで見てきた『校友会報』は、校友会の雑誌部によって編集され、発行されたものであった。

『校友会報』第1号には校友会の会則、役員名とともに「明治43年度校友会支出決算報告」が記されており（『校友会報』第1号、40～44頁）、第2号には1911年5月28日の地久節祝賀会後に開催された校友会の大会と音楽演奏会の記事が報じられている（『校友会報』第2号、22頁）。1915年度には「校風振作の一助」として文芸部、講演部、運動部、風紀衛生部、園芸部が置かれ（『校友会報』第6号、82～83頁）、翌年度には図書部が設けられたようである（『校友会報』第7号、53頁）。

1920年4月に京都女子高等専門学校が開校すると同年6月25日の地久節拝賀式の後に女専の校友会発会式が開かれ、会則が制定された（『校友会雑誌』第10号、156～160頁）。そしてこの会則の規定に従い、1921年より女専独自の『校友会誌』が発行されることになる。

（7）同窓会関係記事

これまで同窓会の歴史といえば「…その組織の源流は、今一つ定かではない。学校要覧によれば、京都高等女学校が誕生した明治四三（一九一〇）年には、高等女学校校友会などの組織が発足すると併せて、同年一〇月に同窓会が創成されたとしているが、その活動内容は後世に明らかにできない。／学園の同窓会が、会則を備え、法規的にも整ったものとして本格的に発足したのは、それから一〇年後の大正九（一九二〇）年三月である」（『百年史』、772頁）との説明が定説となっていた。今回の『校友会報』の発見により、これまで不明と

されてきた同窓会の活動実態を明らかにすることができるようになった。まずはその発足経緯である。

◎同窓会記事 四十三年十月十九日本校卒業生会を催ふし諸般の事につき協議し同窓会を設立す、本校には従来翠松会なるものありて卒業生一般の聯絡と親睦とを図り来りしが四十二年度末本校の経営者変更してより自然に其名を改め遂に此会を組織することにまとまる、当日の出席者は左の如し (『校友会報』第1号、44~45頁) として、職員9名、卒業生30名、互選された役員の名前を記していた。同窓会会則の全文は以下の通りである。

同窓会々則

第一条 本会ハ本校卒業生ヲ以テ組織シ会員相互ノ親睦ヲ図リ動静ヲ明ニシ本校教養ノ主意ヲ拡張スルヲ以テ目的トス

第二条 本会ハ私立京都高等女学校同窓会ト称シ事務所ヲ同校内ニ置ク

第三条 本会ハ本校ノ卒業生ヲ以テ組織ス

第四条 本会ハ会員ヲ分テ正会員客員特別会員ノ三種トス

第五条 本校卒業生ヲ正会員ト云ヒ本校現旧職員ヲ客員ト云ヒ本会事業ニ対シ特ニ功劳アリト認メタルモノヲ特別会員トス

第六条 本会ハ左ノ数部ヲ置ク

一 庶務部 本会ノ庶務一切ヲ処理ス

一 会計部 本会ノ会計一切ヲ処理ス

一 通信部 通信会報編輯等ヲ処理ス

第七条 本会ハ事務ヲ処理スルタメニ会長一名評議員若干名幹事若干名ヲ置ク

第八条 会長ニハ本校々長ヲ推戴シ評議員ハ客員中ヨリ会長之ヲ委嘱シ幹事ハ会員中ヨリ互選シ会長之ヲ任ス任期ハ一ケ年トシ毎年総会ノ時改選ス

第九条 本会ハ毎年本校記念日前ニ定期大会ヲ開キ会務ノ報告規定ノ修正

新発見史料・京都高等女学校『校友会報』の複製・総目次の作成とその公開

等本会ノ会務ニ付キ協議シ且ツ懇話会ヲ開キ旧交ヲ温ムルモノトス

第十条 一地方ニ会員五名以上アル時ハ本会ノ支部ヲ置ク事ヲ得但シ支部
ヲ設ケタルトキハ直ニ本部ニ届出ツ可シ

第十一条 毎年大会ニハ各支部ヨリ代表者ヲ出ス可シ若シ代員出席シ難キ
トキハ支部ニ関スルー切ノ報告ヲ大会前本部ニ送附ス可シ

第十二条 地方会員ニシテ上京シタル時ハ本校寄宿舎ニ滞在スルコトヲ得

第十三条 会員ハ宿所姓名職業ノ変更結婚出産等アル時ハ其ノ都度本会ニ
報告ス可シ

第十四条 会員ハ大会前必ス近状ヲ本会ニ報告ス可シ

第十五条 正会員ハ毎年会費トシテケ月五銭年額五拾銭ヲ納ム可シ客員
及ビ特別会員ハ随意トス但シ金品ノ寄附アルトキハ受納ス

第十六条 会員ノ義務ヲ怠リ又ハ本会ノ名誉ヲ段損スルモノハ理事会ノ決
議ヲ経テ除名スルコトアルベシ (『校友会報』第1号、45～47頁)

その後も1911年3月17日の卒業式後と11月3日の天長節後に同窓会が開催された(『校友会報』第2号、19～20頁)。1913年1月10日には「同窓校友の発起にて本校移転新築工事を祝するため大音楽会」を開催するために準備会が催され(『会報』第3号、33頁)、同年11月2日に慈善市と音楽会が開催された(『校友会報』第4号、110～111頁)。『校友会報』の第7号からは同窓会員からの消息が多数掲載されるようになった。1920年10月19日には六角会館にて「高等女学校十周年祝賀会」が開催されたが、そこでも同窓会は講演会と祝賀会を主催し、式典を支えていた(『校友会誌』第11号、92～93頁)。

『百年史』(772頁)によれば、1920年3月、朝倉校長の指示によって高女と裁女の本格的な同窓会である「藤会」が発足したとあるが、少なくとも『校友会報』の第10号、第11号を見る限り、「藤会」の発足記事は見当たらなかった。同窓会の後継団体となる「藤会」の実態を明らかにするうえでも、『藤会誌』の発掘が不可欠である。

(8) バザー関係記事

文中女学校時代からバザーは人気企画だったようで、『八十年史』には「明治三十八年五月、折しも親鸞聖人降誕会の月に祝賀のバザーを開催している」(76頁)と記されている。高女時代になるとバザーは天長節の前後に開催されるようになった。以下は『校友会報』各号に見る「バザー報告」の摘録である。

- 第1号 「バザー報告」 1910年11月3日 慈善市及び祝賀音楽演奏会
準備会、各係員 手芸品売店係、菓子係 絵画園芸係 接待係、音楽係 西洋料理係 すし係、くだもの係 コーヒ係、生徒より寄贈したる成績品
甲斐校主寄贈品、祝賀音楽会曲目、収支決算報

(『校友会報』第1号、47～53頁)

- 第2号 「バザー報告」 1911年11月2日、3日 校友会の事業として慈善市を開催、収支決算報告

(『校友会報』第2号、24頁)

- 第3号 「製作品展覧会并にバザー報告」 1912年11月2日 展覧会并にバザー開催

(『会報』第3号、40頁)

- 第4号 「慈善市 記事並に報」 1913年11月2日 模擬店、音楽会、金品寄贈者芳名録

(『校友会報』第4号、90～91頁)

- 第5号 欠、第6号 記載なし、第7号 記載なし

- 第8号 「大バザー」 1917年3月27日、30日 慈善市収支

(『校友会報』第8号、52～53頁)

- 第9号～第11号にはバザーの記載なし

このうち1917年3月のバザーは、西本願寺にて催された大谷壽子七回忌法要と本校の広庭で開催された全国仏教婦人会の大会にあわせて実施されたもので、両日とも大勢の人で埋めつくされ「成績品売店」の品もほとんど売り切れ状態になったという。売上金については「此バザーに就て関係者諸賢同窓生諸姉、其他商人諸君より金品を寄贈せられ或は大々の援助を賜はりたるは特に感謝致します。寄附者芳名並に決算左の通りであります、剰余金は本校建築費の中へ寄贈しました」(『校友会報』第8号、53頁)とあった。いずれの記事も「京女

新発見史料・京都高等女学校『校友会報』の複製・総目次の作成とその公開
バザー」の実際を伝える貴重なもので、さらなる研究に寄与するものといえる。

(9) 学芸会・保護者会・運動会関係記事

高女と裁女が設立された当初には企画を立てる余裕もなかったのか、保護者会・学芸会・運動会に関する記事は見られなかったが、1911年7月20日に父兄懇話会に際して校友会の事業として学芸会、1912年7月1日に初めて在学生の保護者会と「技能的学科成績発表会」が催されるようになったようである。『校友会報』各号に見る学芸会・保護者会・運動会関係記事は以下の通りである。

■第1号、記載なし

■第2号 父兄懇話会に際して校友会の事業として学芸会 1911年7月20日
(『校友会報』第2号、32～33頁)

■第3号 学芸会並ニ保護者会 1912年7月1日 技能的学科成績発表会
(『会報』第3号、36頁)

■第4号 学芸会保護者会 1914年7月1日 保護者会并に技能的学科成績発表会
(『校友会報』第4号、82頁)

■第5号 欠

■第6号 学芸会并に保護者会記事 1915年7月4日
(『校友会報』第6号、97頁)

■第7号 運動会概況 1916年3月5日 移転記念運動会
1916年10月31日 大正5年度定期運動会
(『校友会報』第7号、56～58頁)

学芸会並に保護者会記事 1916年6月25日 地久節祝賀式に引き続き開催
(『校友会報』第7号、63～64頁)

■第8号 学芸会保護者会記 1916年7月1日 学芸会並に保護者会
運動会概況 1916年10月31日 運動会開催
(『校友会報』第8号、45～47頁)

■第9号 学芸会記 1918年10月15日学芸会開く、学芸会順序

(『校友会報』第9号、59頁)

- 第10号 運動会記 1919年11月1日 (『校友会雑誌』第10号、147頁)
学芸会記 1919年11月15日
学芸会記 1920年6月25日

(『校友会雑誌』第10号、151～152頁)

- 第11号 学芸会記 1921年6月25日 地久節祝賀式に引き続き開催
運動会記 1921年10月30日 三校連合運動会

(『校友会誌』第10号、98～99頁)

大正時代になると貞明皇后の誕生日にあわせて6月25日を地久節としたことから、学芸会と保護者会の多くは地久節祝賀式に引き続いて開催されるか、7月の第1週に開催されたようである。運動会は10月の末日に実施されていた。プログラムの詳細については『校友会報』各号を参照されたい。

(10) 雑報

『校友会報』の各号には、「新年度雑報」「雑事報告」(第1号)、「雑報」(第2号～第10号)、「雑録 重要記事」(第11号)と名称を異にするものの、学校行事に関する主要記事が年次別に記載されている。復刻版の「総目次」にはそのすべてを掲載することができなかつたため、各年次における特徴的な出来事を選び出し、検索に役立ててもらふこととした。

雑報記事を分類すると、①天皇・皇后・皇太子たちの京都市幸啓に対する学生たちによる奉迎送記事、②学校教職員の出張記事、来校者関係記事、③入学式・卒業式・修学旅行・遠足・運動会・学芸会等の学校行事関係記事に大別できそうである。いずれの記事も女学生たちの一年間の学校生活、課外活動の実際を知るものとして貴重な記録である。

1921年5月に結成された「三校連合社会奉仕会」(女専・高女・裁女の教職員と生徒全員が会員となり社会奉仕に尽力することを目的とするもの)については、『校友会誌』第11号(100～101頁)にその会則、役員、宣伝活動の事例

新発見史料・京都高等女学校『校友会報』の複製・総目次の作成とその公開が報告されている。

(11) 学校の沿革と現況関係記事

『校友会報』の第1号、第4号、第6号、第7号、第8号には「本校の歴史と現況」が掲載されている。以下はその主な記載事項である。

■第1号 本校の歴史及現況

1 創立者及年時 2 位置 3 沿革 4 設備 5 組織及び教職員
生徒数 6 経費予算額

■第4号 本校の沿革及び現況

1 歴史 2 職員敷地及校舎 3 組織其他一覧 大正3年1月15日現在
生徒数他一覧 在学生府県別表 在学生市内小学校出身別表 生徒一
月学資標準 4 現在教職員

■第6号 本校の沿革及び現況

1 歴史 2 敷地及校舎 3 組織其他一覧（大正4年4月12日現在）
生徒数 寄宿生 通学生 在籍生府県別表 婦人会聯合本部経営以来
入学生年別表 土地建物表 生徒一月学資標準 4 現在教職員

■第7号 本校の沿革及び現況

1 歴史 2 敷地及校舎 3 組織其他一覧（大正5年7月末調）
4 現在教職員

■第8号 本校の沿革及び現況

1 歴史 2 設備、経常費等 京都高等女学校課程表 専攻科
京都裁縫女学校課程表 裁縫専攻科 現在教職員 卒業生 生
徒学年別員数及出席歩合 生徒父兄職業別表 生徒出身府県別
京都府生徒出身郡市別

こうした記事はその後の『学校要覧』に相当するもので、沿革や施設・設備はもとより、在学生の出身地・出身学校、一か月の学資、生徒の学年別出席歩合なども記載されており、統計資料としても興味深いものである。

(12) 林間学校関係記事

1915年8月5日から25日まで京都市教育会・京都市学校医会主催による林間学校が、阿弥陀ヶ峰の麓である太閤坦で開催された。これは体力や体質の弱い小学校5、6年生を集め、体操や遊戯を通して心身の鍛錬を図ることを目的としたものであった。太閤坦に隣接して高女と裁女の校舎があったことから校内に林間学校の事務所が置かれ、毎日の集合と解散、昼食の会場とされた。『校友会報』第6号(31～36頁)には教員の北村伊三郎による「林間学校所見」が掲載されている。また1916年に実施された林間学校については『校友会報』第7号の巻末に「大正五年夏期林間学校報告」として3枚の写真とともに24頁にわたってまとめられている。いずれも新発見史料である。

(13) 卒業式ならびに卒業生氏名関係記事

1910年2月に甲斐駒藏が矢部善藏より高女を買い取り、文中女学校の学生を編入させたことから、同年3月20日に高女本科生の第1回卒業式と裁縫専修科の第2回卒業式、それに商女本科生の第1回卒業式が行われた。1911年に併設された裁女では速成科の修業年限が1ヶ年であったことから翌年3月には卒業生を出すこととなった。卒業式は毎年3月に举行されたが、高女・裁女の各学科の修業年限が異なっていたことから卒業式の開催回数は不揃いで、『校友会報』の編者にも混乱があったようである。「卒業証書授与式」の記事にはしばしば誤りが散見されるため、注意が必要である。

こうした点を補うために作成したものが以下の2つの表である。表1は各号の巻末に掲載された「卒業生氏名」の中から文中女学校の卒業回ごとに記載された卒業生の氏名数をまとめたものである。同様に表2は「卒業生氏名」を根拠として、高女・裁女・商女の学科別・卒業回別に記載されていた氏名数を示したものである。これらはいずれも同窓会の会員として名簿に記載されたものから算出したものである。学籍原簿にもとづく卒業生数とは異なるものだが、『校友会報』に掲載された「卒業生氏名」を史料として活用し、考察する際の

指標として利用していただければ幸いです。

表1 文中女学校の卒業式年月と卒業生氏名数

回	卒業式年月	卒業生氏名数	回	卒業式年月	卒業生氏名数
第1回	1901年3月	8名	第7回	1908年3月	11名
第2回	1902年3月	7名	第8回	1909年3月	6名
第3回	1904年3月	3名	第9回	1910年3月	7名
第4回	1905年3月	11名	第1回専攻科	nd	4名
第5回	1906年3月	10名	合計		73名
第6回	1907年3月	6名			

〔典拠〕 第1回～第9回の卒業生数は、『校友会報』第1号「卒業生氏名」(1911年5月28日)に記載されていた人数による。第1回専攻科の学科名と人数は『校友会報』第4号「卒業生氏名」(1914年11月1日)による。なお、文中女学校は1910年5月に廃校の申請を京都府に提出していた。

表2 京都高等女学校・裁縫女学校・私立京都商業女学校の卒業式年月日と卒業生氏名数

校友会報 号数	学校の名称 学科名 設置年 卒業式 年月日	私立京都高等女学校			私立京都裁縫女学校			私立京都商業女学校	
		本科 1907年3ヶ年 1910年4ヶ年	裁縫専修科 1907年2ヶ年 1908年3ヶ年 1910年3ヶ年	補習科 1910年1ヶ年 1917年専攻科	本科 1911年2ヶ年 1916年3ヶ年	補習科 1913年1ヶ年 1918年専攻科	速成科 1911年1ヶ年	本科 1908年	速成科 1908年
1号	1909年3月		第1回 20名						第1回 4名
1号	1910年3月20日	第1回 34名	第2回 24名					第1回 10名	
1号	1911年3月17日	第2回 30名	第3回 12名	第1回 3名					
2号	1912年3月27日	第3回 15名	第4回 9名	第2回 4名	第1回 1名		第1回 7名		
3号	1913年3月22日	第4回 14名	第5回 23名	第3回 4名			第2回 5名		
4号	1914年3月22日	第5回 16名		第4回 3名	第2回 25名	第1回 5名	第3回 4名		
6号	1915年3月22日	第6回 22名		第5回 1名	第3回 17名	第2回 5名			
7号	1916年3月21日	第7回 32名		第6回 9名	第4回 33名	第3回 10名			
8号	1917年3月24日	第8回 39名		第7回 12名	第5回 34名	第4回 13名			
9号	1918年3月25日	第9回 46名			第6回 47名	第5回 2名			
10号	1919年3月24日	第10回 52名		専攻科 第1回 9名	第7回 54名	専攻科 第1回 31名			
10号	1920年3月25日	第11回 62名		第2回 8名	第8回 52名	第2回 18名			
11号	1921年3月25日	第11回 81名			第9回 48名	第3回 32名			

〔典拠〕 『校友会報』各号記載されていた「卒業生氏名」の人数ならびに『京都女子学園80年史』所収「三卒業生一覧 2 京都高等女学校・京都裁縫女学校・京都商業女学校」(588頁)をもとに作成。

おわりに—『校友会報』の発見と復刻版作成の意義

新たな学園史叙述の可能性 復刻版『校友会報』の解説として、高女・裁女の設立過程と学科の変遷、『校友会報』の誌面構成とその見どころについて説明してきた。『校友会報』が発見されたことの意義は、なによりも不明なことが多かった高女・裁女の創設期の10年について、論壇、女学生たちの作文、校友会・同窓会による各種行事、バザー・学会会・運動会、卒業式・卒業生氏名という豊富な史料にもとづき、詳細にあとづけることができることになったことである。

これまで当該期の学校関係資料といえば『京都府庁文書』などの公文書もしくは『教海一瀾』や『婦人』などの宗門系の新聞や雑誌の記事に依らねばならなかった。そうした伝聞史料にも限りがあることから、勢い、創設期を支えた三人の女性（大谷籌子・九条武子・甲斐和里子）に焦点が当てられ、その女子教育に向けた情熱を顕彰するという語りが構築されることとなった。創設期10年の詳細を知りうる新たな史料と出会えたことで、私たちは創設期を支えた三女性の存在を相対化する視点をあわせ持つことができるようになり、『八十年史』や『百年史』が成しえなかった、女学生たちを主体に据えた新たな学園史の叙述を可能とする素材を手に入れることができたのである。これまでにない切り口からの学園史叙述がここから生まれることを期待したい。

更なる課題—『校友会報』は何号まで刊行されたのか？ 今回発見された『校友会報』の末尾は、1922年に発行された11号であった。これが最終号だったのだろうか。

『八十年史』によれば、高女・裁女はその同窓会として1920年3月に「藤会」を組織し、1921年1月1日に『藤会誌』を創刊したと記している（『八十年史』116、714頁）。その第1号は未見であるが、筆者は『藤会誌』第2号（1922年7月27日付けで発行されたもの）の存在を確認している。その誌面には『校友会報』と同様に「文苑」「作品」「創作」「消息」「会報」欄が設けられ、巻末には28頁にわたって「卒業生氏名」が掲げられていた。

他方、女専では1920年6月25日に校友会が発足し、その会則で図書部が雑誌を発行すると規定されていた（『校友会雑誌』第10号、156、158頁）。女専の校友会による『校友会誌』についてもその創刊号は未見であるが、第7号（1927年3月23日発行）は京都女子大学図書館に所蔵されている。そこから逆算すると女専の『校友会誌』は1921年3月に創刊されたといえそうである。

これらのことを整理すると1922年には、

- A 高女・裁女の校友会による『校友会誌』第11号（1922年3月25日発行）
- B 高女・裁女の同窓会による『藤会誌』第2号（1922年7月27日発行）
- C 女専の校友会『校友会誌』第2号（発行年月日不詳）

の3誌が発行されていたこととなる。

Aの高女・裁女の校友会による『校友会誌』第11号には「卒業生氏名」欄がなかったが、それはBの高女・裁女の同窓会による『藤会誌』第2号に「卒業生氏名」欄が設けられたことにより、そこに移されたためであろう。この時点で高女・裁女の校友会による『校友会報』は文字通り、在校生と教職員による「会報」へと特化したわけである。しかしながら、第12号が発行されたか否かについては未だ不明である。

その後女専では1922年3月に第1回卒業式が挙行され、9名の卒業生を輩出し、翌年3月にその同窓会である「錦陵会」が発足した（『八十年史』716、717頁）。その同窓会誌は『錦陵会誌』と名付けられており、Cの女専『校友会誌』とも異なるもので、新たにDの系譜となるものである。現時点でその所在は不明である。

『校友会報』から『東山タイムス』への系譜 1927年5月21日、高女・裁女と女専を統一的に連絡することを目的として『東山時報』が創刊された。手書きの謄写版刷りで、ひと月に3回発行された一枚のものである。高女・裁女・女専の行事とともに同窓会行事についても記載されている。1927年11月21日発行の第10号まで確認できている。

1928年4月12日には活版印刷の『東山タイムス』が創刊された。その「発刊

の辞」は「〔タイムスは〕学校それ自身や、校友会はた同窓会そのもの、機関ではありませぬが…」と述べていたが、高女・裁女・女専の行事案内に加えて「同窓会だより」も掲載するものであった。そしてその最初の「同窓会だより」には「毎年一月一日発行の藤会誌は第八号を名残として終刊になりました。……今後諸姉への御報告なり御案内は此のタイムスを利用する事にしますから御諒知おき下さいませ」（『東山タイムス』、第1号、3頁）との告知が記されていた。『藤会誌』の終刊案内であった。

こうして1911年に創刊された『校友会報』は少なくとも1922年の発行にかかる『校友会誌』第11号まで続き、その間に高女・裁女の同窓会誌『藤会誌』が刊行され、そこに卒業生の消息と氏名が記載されるにいたったことは明らかである。その後1920年に開校した女専においても独自の校友会が組織され、1927年3月の発行にかかる7号まで『校友会誌』が編纂されていた。ところが1927年5月、高女・裁女と女専を統一的に連絡することを目的として1枚ものの『東山時報』が創刊されることとなり、翌年には新聞タイプの『東山タイムス』が発刊されることとなった。それに合わせて『藤会誌』は終刊となった。女専の『校友会誌』も軌を一にするようにして廃刊となったと思われる。この間に高女・裁女・女専では何が起こっていたのか——この点を解明するためにも、更なる史料の発掘が不可欠である。

（本稿は、令和4年度京都女子大学宗教・文化研究所研究助成「新発見史料・京都高等女学校『校友会報』の複製・総目次の作成とその公開」（坂口満宏）の成果によるものである）

受付日 令和5（2023）年9月13日 採用日 令和6（2024）年2月7日

<キーワード>

京都高等女学校 京都裁縫女学校 京都女子高等専門学校
校友会報